

地理学系分野における景観概念の変遷

渡部章郎*・進士五十八**・山部能宜***

(平成 20 年 11 月 21 日受付/平成 21 年 1 月 23 日受理)

要約：2004 年には景観法が公布・施行され「景観」は法律用語になった。しかしそれ以前から、「景観」は様々な分野で使用された。それら異なった分野では、「景観」の語は導入の経緯や使い方も異なっている。本研究は景観用語と概念の変遷を専門分野別にたどり、明らかにしようとするもので、本報では特に地理学系分野について考察した。本稿で得られた結論は、次の 3 点にまとめられる。

- ① 地理学系の景観概念は、ドイツ Landschaft 論の影響を強く受け展開されるが、ドイツでも概念規定が不明確で、地理学の本質論に関係する問題でもあるため、日本でも激しい議論がなされてきた。
- ② 景観概念は「地域」か「風景」か、という問題で常に議論されてきた。景観概念の不明確さは、ドイツの Landschaft が地域と風景という、別のルーツを持つ 2 つの意味を持つ言葉であったことに由来する。また、類義語である Landscape や風景には地域の意味が存在しない点大きい。
- ③ 近年は、自然地理学では、生態学と結びついた「地域」の研究、また人文地理学は、英語圏の Landscape の解釈から「風景」といった人間を主体としたイメージや認識論からのアプローチによる概念研究がなされている。

キーワード：景観、ランドスケープ、ラントシャフト、景観概念の変遷、地理学系分野

1. 研究の目的と方法

2004 年、景観法が施行された。景観法は「日本の都市、農山漁村等における良好な景観の形成を促進するため、景観計画の策定その他の施策を総合的に講ずることにより、美しく風格のある国土の形成、潤いのある豊かな生活環境の創造及び个性的で活力ある地域社会の実現を図り、もって国民生活の向上並びに国民経済及び地域社会の健全な発展に寄与することを目的とする」としている。ただ、法ではあえて「景観」用語を定義していない。景観は、研究分野が多岐にわたっており、分野によって景観概念も異なる。筆者らは、今後の景観行政の発展や有効な景観計画の策定のためにも、専門分野別の、景観の概念の変遷や用法の明確化が必要と考えた。特に本報では地理学分野について明らかにする。

1900 年（三好学によって 1902 年に「景観」用語の初使用された）～2008 年までの期間を対象に、景観及び景観関連（ここでは景観、風景、Landschaft, Landscape）の語と概念（concept）に関して、本報では主に地理学分野での著作物における論文、著書等を網羅的に調査し、その中の主要文献を時系列にまとめ、そこから景観概念の変遷過程や背景、地理学分野の特徴や評価を考察する。

地理学分野の景観概念の既往研究として、岡田俊裕の著書・論文、特に「敗戦前の日本における「景観」概念と「景観」学説」¹⁾ が著名である。これらを参考・基本に現在まで

景観概念の変遷を考察していく。図 1 がそのまとめである。既往研究は、詳細なものは「敗戦前」までの研究しかなされていない。

2. ドイツ地理学の Landschaft 論

地理学系分野の景観概念は、1920 年代にドイツ地理学界のラントシャフト（Landschaft）論を日本の地理学界が最新の重要テーマとして、位置づけ導入を図ったことに始まるが、その Landschaft の訳として、三好の「景観」を使用することによって問題が生じてくる。ラントシャフトの議論は、手塚章「ドイツ地理学におけるラントシャフト論の展開」²⁾（1987）に詳しい、それを要約すると以下になる。

- ① ラントシャフトの概念は、20 世紀のドイツ地理学において、中心的なテーマの一つ。
- ② ラントシャフトという語自体が、数多くの異なった意味に用いられる語。ラントシャフトの概念規定が、研究者によりその内容を異にしたりする。概念研究は、地理学の本質にかかわる、理論的問題を含んでいる。
- ③ 地理学でのラントシャフトという概念規定や用語法上の不明快さは、ドイツにおいてすらラントシャフトという語に常につきまとう問題であった。
- ④ 近世以降、ラントシャフトには、大きく分けると、地区、地域という意味と、風景、景観という意味の 2 つの系列が並存。これをラントシャフト（地域）、ラント

* 東京農業大学大学院農学研究科環境共生学専攻

** 東京農業大学地域環境科学部造園科学科

*** 東京農業大学農学部



図1 地理学系の「景観概念」変遷図

(注) この図1は岡田俊裕「敗戦前の日本における「景観」概念と「景観」学説」を参考にした。

シャフト（景觀）と表現するならば、一般的にラントシャフト（景觀）が圧倒的な優勢。他方このような美的地理学の流れに対して、異なる観点も存在しており、20世紀前半におけるラントシャフト論は、これら2つの流れの錯綜もしくは統合としてとらえることが出来る。

上記のように、Landschaft の概念解釈についてはドイツでも概念や用語法上、不明確であったにもかかわらず、日本でも同時進行的に進められた。

日本における地理学は1925年に日本地理学会が創立された。その機関誌として「地理学評論」（1925）が創刊され、本格的に外国の知識の吸収を図る。特にドイツの地理学で、その頃盛んであったのが、Landschaft（ラントシャフト）という用語・概念である。

ドイツ・ラントシャフト論の戦前日本の解釈について、岡田俊裕（1992）⁵⁷⁾はLandschaft (Landscape, Paysage) の戦前の訳語として、「風景」「風土」「景相」「地理的景觀」「地理学的景觀」「景域」「景觀」「風景形態」「地相景」「環象」「地郷」等の訳語を挙げている。多くの訳語が提案され、このことは言語の意味把握が難しいことを示している。Landschaft は訳語だけでなく、様々な概念解釈が行われた。また、岡田はLandschaft の日本での「敗戦前の定義例」として、①地域（単位）の総合的内容②類型としての地域③地域の可視的・形状的側面の3分類を行っている。

3. 1920年代～1960年代までの地理学系景觀論

1920年代中ごろから、新しいLandschaft の理論導入に伴い、活発な議論が戦前まで行われる。

1925年、辻村太郎（1890～1983）は、地理学評論でパスカルゲの著書（1922, 1924）を紹介し、その冒頭でLandschaft を風景や景と訳し、「風景を正確に論述することは地理学者の仕事の大部分を占めている」⁵⁸⁾と記述し日本のラントシャフト論がスタートする。

表1に示すように、Landschaft の定義例として、初期の時点では、①地域の総合が大半であったが、1930年以降は③地域の可視的・形状的側面、の主張が多くなる。

表1で、「①地域の総合的内容」としてあげられているのは、1926年の大内武次が初めである。大内は「人文地理学の地位」⁶⁰⁾のなかで、ヴローがその著「地理学論」に於いて鳥瞰的觀察の必要性を強調し、それは結局「地理学的風景（Paysages géographiques）」として表現せられなければならないと云い、これは「地域に於ける地上現象の綜合体を最もよく指し示すもの」で、「この綜合を表現する風景は絵画に於いて、文学に於いて、自然科学に於いて用ゐられる風景の語とはその意義を全く異にするのであるから、ヴローはこれに冠する地理学的と云う言葉を以てした。地理学的風景を地理学は認識して、これを表現する地理術語が必要であると、最近独逸地理学者が最近、風土（Landschaft）なる語を使うに到ったのも同様である」と記述している。

1930年、三沢勝衛は「郷土の地理学的考察に就いて」で、

表1 Landschaft (Landscape, paysage) の定義例と和訳

定義 発表年	①地域の総合的内容	②類型としての地域	③地域の可視的・形状的側面
1926	大内武次（風土）		
1927	西亀正夫（地理的景觀）		
1928		佐藤弘（景相）	
1929	小田内道敏（風景形態） 保柳睦美（地理的景觀、景觀） 飯本信之（景域）	富田芳郎（地相景）	
1930	三沢勝衛（地理的景觀） 綿貫勇彦（風景）		辻村太郎（景觀）
1931	三沢勝衛（地理的景觀）		
1932	飯本信之（景域）		辻村太郎（景觀）
1933	小牧実繁（景觀） 渡辺光（景域）		辻村太郎（景觀） 松村繁樹（風景）
1935			綿貫勇彦（景觀）
1936	飯本信之（景域） 佐藤弘（景觀）		
1937	小原敬士（地的景觀）		辻村太郎（景觀）
1944			飯塚浩二（景觀）
1955	飯本信之（景域）		
1957		野間三郎（景觀）	野間三郎（景觀） 木内信蔵（景觀）

（出典）岡田俊裕「敗戦前の日本における「景觀」概念と「景觀」学説」⁵⁹⁾（1987）の第2表を中心に、一部筆者が加筆した。（注）岡田の表には、和訳や30年・32年の辻村、32年の飯本及び終戦後は記入されていない。

「個性的接觸面を、其の比較的明瞭な一面である地表に即して、従来一般に用いられて来ている地域なる言葉を採用し、地理的地域なる言葉で表したいと思う」⁶¹⁾と記述している。

その中で、飯本信之はLandschaft の訳語としての「景域」を、戦後まで一貫して主張し、渡辺光や、地理学系以外の分野（緑地学の井手久登等）でも採用され、現在でも使用されている。1929年に飯本信之は『政治地理学』⁶²⁾のなかで「新しい地理学の概念が生まれて来た。それはシュリューターに依て提案されたもので、物質に充たされてゐる限界ある地的空間即ち景域を地理的研究の中心に置かむとする」「景域」は独逸語のLandschaft の訳語である。ランドシャフト本来の意義は景色、風景であるが、厳密に言えば一望の中に収まれ得る地球表面である。芸術家は之を見れば主観的に感受するも、地理学者は之を総体として客観的に叙述する」「此のランドシャフトの邦訳は実に困難であって、我国の地理学界に於いて用ひらるゝ訳語でも景觀、景相、景等がある。併し孰れも地理学的風景即ち狭義のランドシャフトの含蓄する所の限界ある地的空間の概念を表明して居ない」としてLandschaft の訳語に景域を提案している。「③地域の可視的・形状的側面」は辻村太郎が中心であり、Landschaft の訳語は主に景觀を使用している。辻村の景觀概念に関しての記述では、「景觀」という用語は三好が初使用と明記しているのが特色である。1937年辻村は『景觀地理学講話』⁶³⁾で「景觀は独逸語のLandschaft に対して、植物学者の三好博士が与へられた名称である」「Landschaft の概念として、大体に於いて眼に映ずる景色の特性と考へて差支ない。ドイツの地理学者の中に景觀地域（Landschaftsgebiet）を景觀と呼ぶ人もなくないが、混同を防ぐ為此処では地域の意味を含ませない」と記述した、この書籍は写真使用し景觀を解説し、景觀の意義、耕作景觀、交通景觀、村落景觀、都市景觀と

分類し、景観地理学という分野を確立したとされている。

「景観」という用語をめぐる、1941年に三尾良次郎と胡越生（無署名）とのあいだで、議論がおこった。

三尾は『「景観」といふ用語を改めたい』⁶⁴⁾ (1941)の中で、「「景観」の意義は風景又は外観などの語とそれと大体似たものである。従って若し「景観」の語の造語者が、此の語によって風景又は外観などの語の意義と著しく違った意義を伝えようと思うならば、此の新造語は学術用語として最も忌むべき複数の意義をもつに至るおそれが多分にある」と記述している。

一方、胡越生（無署名）は『「景観」は「景観」でよい』⁶⁵⁾ (1941)で、次のように反論した。「近代の地理学の発達はその対象となる事象を科学的に徹に入り組を穿って分析的に研究し、更に此等を有機的に綜合することによって達成されたのであるが、地誌の叙述には尚ほ之だけでは到底完成され得ぬ或るものが常に残存することを否定出来ない。諺に云ふ「百聞は一見に若かず」は即ち是れであり、茲に於て分析綜合の科学的攻究法とは別の立場をとる」「「景観」なる概念は上述の如く直観的・主観的・芸術的のものであって、決して分析して考へるものでないと、又斯様な分析では到底景観本来の姿を代表し得ない」と記している。

野間三郎は戦前・戦後を通じ、景観の概念を、フンボルトや *Landschaft* の語源も含めて研究を行ってきた。1963年、野間は『近代地理学の潮流』⁶⁶⁾で、「Grimmのドイツ語字典をみても、*Landschaft*が古くから多くの意味に用いられていたことは一目であきらかになるが、それらは縮めて八種の意義に分類されている。しかしもともとそれは、位置及びその自然的性質に於いて関連のある一帯の地、土地の複合体が根本義だとされていて、通常考えられている様な風景という意味は派生である」「Humboldtが多くの地理学的観察に範型を与えることになった景観の相観 *Physiognomik der Landschaft* は、地理学的地域の形態学的研究を方法的にも樹立したものであった。Humboldtは *Landschaft* の研究という点に於いてもその近代的な出発点であり、古典であるともいえる」としている。また、野間は『地理学総論』(1967)でも、同様の主張をしている。

終戦後から1960年代にかけては景観概念の文献数や景観の議論は少なくなっている。

そのなかで、米国でも *Landscape* と *Landschaft* の語源から来る差異について日本と同様な課題が生じている。

1957年、ハーツホーン、『地理学方法論』⁶⁷⁾ (原書1939)は、「英語の *Landscape* という言葉が普通に含んでる意味は、もしもこの言葉が明らかに外面的可視的な地球の表面を意味するものと定義されたならば、地理的に大いに価値あるものであることがわかる」「われわれが定義したような意味に対しては、いろいろな筆者が用いている *Landschaftsbild* (景観像) という言葉が一番よいであろう」と *Landscape* と *Landschaft* の相違点について具体的に述べている。

1957年に木内信蔵は『人文地理学』⁶⁸⁾で「景色はそれを眺めるものの主観において統一性を有するが、景観はその

構成に参加する多数要素の統一であり、総合像である」として、「景観は次の如く定義することができよう。主として視覚によって認知される場所の有形的な像 (form, Bild) が景観である」「トロール (1950) が従来行われた景観概念を比較考察した中に“一つの景観は一定の相観 (*Physiognomie*) 即ち景観像 (*Landschaftsbild*) を伴ない、一定の事実によって充たされている」と述べている。

4. 1970年代～1980年代までの地理学系景観論

1973年、佐々木博は『地理学辞典』⁶⁹⁾で、景観の定義を以下のように記している。これは、現在でも地理学で標準的な定義とされている。「地理学で用いる景観 (= 地理景観) とは、“任意の広さの地表断面片であり、その地表面断面片は、その外貌と内在する諸現象により、また内外の位置関係によって一定の性格を持つ空間単元で、別の性格を持つ周囲の地表面とは区別して取り出せる」としている。

1981年に西川治は「景観論の学際性と民衆性」⁷⁰⁾の中で、景観に対して標準的な定義を与えたのは、K. ビュルガー (1935) で、それによると、「ランドシャフトは地球表面の一部であり、その外貌、諸現象の相互作用、内外の位置関係によって一定の性格を備え、その周囲から区別される空間単元である」としている。さらに西川は、景観という多義語の仕分けが必要として「筆者は任意の地表面の一部を構成する物的複合には景体をあて、その相観には景観を用い、その特徴的な空間的なまとまりを景域とし、視覚によって把握された景体像を景像として相互に区別することを提案したい」としている。

1985年、田村百代は「地理学における「景観」と「相観」—わが国地理学界での混乱」⁷¹⁾で、「「景観」はドイツ語の“*Landschaft*”の訳語として紹介されたわけであるが、当初から二通りの意味で理解されていた。「景観」は、現在でも日本の地理学界において景色・風景の意味に利用されることも多く、相変わらず地域と景色・風景との二通りの意味で使用され続けている」と記している。

1970年代に入ると、トロールが提唱 (1938) した景観生態学が、日本の地理学界でも本格化してくる。景観生態学の初記述は、1951年で、西川が、トロールの景観生態学を *ökotop* (エコトープ) という用語とともに紹介⁷²⁾している、1974年杉浦直が「景観生態学の理論と方法」⁷³⁾で、ドイツの景観生態学を紹介している。

それによると、「景観生態学は、いわゆる景観論の流れと密接な係わり合いを持って成立した、しかし景観 *Landschaft* という用語に関する過去の煩瑣な議論は、つとに知られており、景観生態学においても、その概念上の定義はもとより簡単な問題ではない」と記す。1981年にも杉浦は『生態地理学』⁷⁴⁾で、「景観生態学における「景観」 (*Landschaft*) の概念は、単なる地球表面の形状ではもはやなく、地域における諸現象と諸作用の因果関係で結び付けられた複合体である。したがって、その実態の把握にとって、生物界と無機自然との因果関係を追求してきた生態学的アプローチが、一つの有力な手法として浮かび上がってくる」と論じている。

5. 1990年代～2000年代までの地理学系景観論

1991年、石井英也は『地域と環境』⁷⁵⁾で、「地理学にとっての景観は、当初、視覚によって認められる地表の相貌、つまり地表現象の形態の解明と解釈されていた。しかし、ある景観はさまざまな要素からなっており、それらの要素はいずれもそれ単独で存在しうるものではない。景観は、要素相互が密接に絡みあってはじめて維持されるものである。それゆえ、景観全体の連関構造の解明、すなわち生態学的観点が重視されるべきという主張がなされるようになった」と生態学的観点の重視を記している。

1995年、横山秀司は『景観生態学』⁷⁶⁾で、「1938年、ドイツの地理学者C. トロールによって創始された景観生態学は1960年代より自然地理学を中心に研究が蓄積され、1970年代には地理学の一分野として確立した」と経緯を述べ、さらに、「景観と生態学」⁷⁷⁾(1996)で、「景観生態学の対象とする景観とは、単なる風景、景色ではなく、景観形成に関わりをもつ地因子(気候、地形、土壌、地質、水、動物、植物)の相互作用や、人間の作用の関与によって形成され、地表面で表現された空間統一体としての景観」と記述している。

2001年、杉谷隆は『風景の字典』⁷⁸⁾の、伝統的地理学という景観とはなにか? のなかで「伝統的意味での景観とは、風景すなわち“人間に見えた地域の像”のことではなく、“同質の像を見せる地域そのもの”を指す」とし、さらに、「最近の人文・社会系で景観研究の看板を出す場合は、景域ではなく、風景としての景観を対象にする」と記述している。

1998年、千田裕は『風景の文化誌』⁷⁹⁾で、「地理学というLandschaftは地域の統一体、土地の複合体を意味するのであり、ドイツ景観学はこの意味にしたがって形成されてきた。しかし、地域がそれを構成する諸要素によって成り立つ統一的複合体といっても、諸要素のつながりをどのように解き明かすのか至難のこと、つまり、景観の複合性というのは科学的な叙述よりも文学的に語らねばならない、イメージの世界」また、「可能な限りわかりやすい日本語にするならば、Landschaftは「土地性」で、Landscapeは「風景」であろう。今、人文主義地理学の対象となるものは、風景でなければならない。風景はそれを見る人によってさまざまに見えるということを、とりあえずのよりどころとして、地理学は景観からの呪縛から逃れようとしている」と記述している。

1990年代に入ると、英語圏のLandscape論が、日本の地理学界にも本格的に影響を与えてくる。

『オックスフォード地理学辞典』⁸⁰⁾(2003)では「Landscape」の訳として「土地景観」としている。Landscapeの意味は「地域、地域の外観、または、その外観を作りだす対象の集まりのこと。C・サウワーズが、1925年に地理学において初めてこの用語を用いた。彼は、景観という概念は人間とその環境との相互作用の現れであると主張した」と記述されている。

1995年に山野正彦は、『景観概念の生成と風景画および

相貌学の発達』⁸¹⁾で「Landscapeという語は、概念の系譜からするとドイツ語のLandschaftの翻訳語として、英語圏の地理学にあらわれたと考えてよい。しかしまた別に、イギリスのW.G. ホスキンスやアメリカのJ.B. ジャクソンにおけるこの語の使用は、そのようなドイツの景観概念に由来するとはいえない、もっと土着的な意味に根ざすものであるものであると見られる」また、イギリスの文化地理学者で、景観概念についての研究書を著した、デニス・コズグロブは、「景観」(Landscape)を「世界を見る一つの方法」(a way of seeing the world)であると述べ、これが外部世界の情景を描いたり、イメージを記述したりする思想であること、すなわち一つのイデオロギー的性格を有することを強調する。景観とは歴史のある段階で、ある階級の出現によって可能となったものの見方であると考えてるのである。かれは、「景観とはそれを能動的にみる人間によって、主観的に構成されるものであり、単に見られる世界ではない」と、景観は客観的なものではなく主観的なものとしている。

2000年のThe Dictionary of Human Geographyには、「コズグロブ(1998年)はイメージ(Image)か物(object)としてというより“見ることの方法”としてのランドスケープを再定義した」⁸²⁾と書かれている。

2000年、阿部一は『空間の比較文化史』⁸³⁾で、「風景」(ランドスケープ)は、環境の特定の「見かた」による知覚像やイメージである。そして、その「見かた」とは、「風景とはこういったもの」というイメージである。そのイメージに基づいて、風景が見いだされる。ところが風景のイメージとは、風景以外のなにものでもない。したがって、風景は環境の「見かた」そのものである。われわれは、風景という外的なものを一般化して取り出すことはできない。どんな環境であっても、われわれが風景と見なすとき、それは風景となる。風景という「見かた」によって、環境は風景として知覚されるとしている。

2006年、西部均は「日本における景観論/風景論」⁸⁴⁾で、「客観的な土地の形状を問うときに景観を、主観的な土地の意味を問うときに風景を使い分ける一般的傾向がある、しかし、景観/風景という現象は、焦点の当てどころにより、又観察される出来事の展開次第で、物質の相が突如として見えたり、イメージの相が深く感情を突き動かしたりするが、それはあくまで同一の現象に備わる位相の違いに過ぎない。時には景観=風景としか言いようのないものを目にする」として景観と風景の概念の再考を促している。

6. 地理学系分野における景観概念の変遷

地理学系の景観論は1920年代、ドイツのLandschaft論が日本に導入されたことから始まる。しかしその概念や訳語に関して激しい議論がおこなわれる。現在では、伝統的な地理学概念では「地域(の総合)」が、訳語としては「景観」におちついている。

近年の景観研究では、自然地理学からのアプローチとして、代表的なものとして「景観生態学」がある。横山によるとここでは「景観形成に関わりをもつ地因子(気候、地

形、土壌、地質、水、動物、植物)の相互作用や、人間の作用の関与によって形成され、地表面で表現された空間統一体としての景観である」⁸⁵⁾とされている。

一方、人文地理学では「1970年代以降、景観に内包された地域の文化を解釈しようとする議論が起こり、加えて近代合理主義にたいするアンチテーゼとしての人文主義地理学の活性化に伴って、空間認知、景観が有する価値、心に映ずる景観像などについて考察されるようになってきた」⁸⁶⁾とされ、特に英語圏のランドスケープの解釈から、都市において、目に見える景観から、その背後にある目に見えないパターンや作家の意図やメッセージを読み取ろうとする「景観テキスト論」、や「景観」は見るための方法(a way of seeing)というような、様々な景観のとらえ方が展開されている。千田のように「人文主義地理学の対象となるものは、風景でなければならない」として、「風景」を使用しようとする考えもでているのである。

7. Landschaft の語源からの考察

景観概念は、大別するに、二つの系統がある。一つは、ドイツの Landschaft の概念に基づくものであるが、ラントシャフトには①地域(同質の像を見せる地域)②風景(人間に見える地域の像)の意味があり、地理景観は①となる。地理学系、景観生態学、は①の観点が中心的とらえ方である。文学系、工学系、造園学系など他の分野が主に②の観点が中心である。②は英語の Landscape、風景のように人の視線、見えることに重点がおかれている概念である。この基本的な違いが、現代の景観概念を混乱させている原因ではないか。景観とは①地域か②風景かまた、③として①と②を包含(地域+風景)したものかの議論である。

この混乱の原因は、Landscape の語源にさかのぼって考える必要がある。主な景観(風景)同義語としての、オランダ語 Landschap、ドイツ語 Landschaft は共に8世紀末に初出現する。Landscape は類似の意味を持つラテン語 patria (国)、provincia (地方)、region (領域)が存在し、地理的表現の用語であった⁸⁷⁾。それが、1500年頃に「風景画」という意味が用語に重ねられ描写表現分野の意味をもつようになる。この時点で、Landscape は地域と風景画という2つの意味を持つようになりその後、風景という言葉にもなっていく。

一方英語の Landscape の語源はまず、Landskip として、風景画の意味での描写表現の分野で1598年初出現しており、18世紀までは活用されるが現在は使用されていない。18世紀に入って英語 Landscape が出現(1725年、初出現:これは風景という認識分野において、オックスフォード辞典第2義)する。Landscape は風景という用語(認識分野)から出発するので、地域という意味は含まれていない⁸⁸⁾。

②の風景は Landscape と類似である。工学系、造園学系の分野は英語圏の Landscape の概念の影響が考えられる、特に「造園学」はアメリカで成立した、Landscape Architecture を翻訳したものであり、また工学系の景観

を使用しているのは、Landscape の概念からきていることもある。そのため、この分野として風景と景観は、ほぼ同様という立場に立っている人が多い。しかし Landschaft の景観では語源からしても、Landscape 論としても、景観は地域か、風景かの激しい議論が行われてきたのは、図1からも明らかである。

以上、景観概念の不明確さは、ドイツの Landschaft が地域と風景という、別のルーツを持つ2つの意味を持つための言葉であったことに由来することが考察された。

辻村太郎が景観という訳語をあて、三好学が景観を初使用したのを襲用したと明記(1933)した。しかし、三好学が景観という用語を初使用(1902)して長時間たち、一般にも広まっていた、その「景観」を Landschaft の訳語としての景観を当てたことにもよる。また類義語である、Landscape や風景には地域の意味が存在しない点が大き

8. おわりに

地理学系の景観概念の変遷をまとめる。

1920年代の後半から、ドイツ・ラントシャフト論の影響をうけ日本でも、Landscape の翻訳、概念の解釈・検討が行われた。ラントシャフトの概念検討は1930年代がもっとも盛んであった。

そのなかで、地理学の第一人者であった、辻村太郎は Landschaft の訳語として「景観」、概念としては「風景」をあて、さらに「地域の意味を含ませない」とした。しかし、「地域」は地理学上で「地誌学」と関係が深く重要な分野である。景観概念は地理学の本質にかかわる問題を含んでいることでもあり、激しい議論がなされた。

戦後からは景観研究は少なくなり、景観概念も明確でなくなった。

1973年に佐々木は、景観とは「任意の広さの地表断面片であり、その地表断面片は、その外貌と内在する諸現象により、また内外の位置関係によって一定の性格を持つ空間単元で、別の性格を持つ周囲の地表面とは区別して取り出せる」として、これが標準的な定義とされている。

現在でも、日本の地理学会において景観は「地域」と「風景」との二つの意味で使用され続けているといわれているが、伝統的地理学にいう景観は、「風景」ではなく「地域」をさすというのが一般的な解釈である。

近年は、自然地理学では、生態学と結びついた景観(地域)の研究、また人文地理学は、英語圏の Landscape の解釈から景観(風景)といった人間を主体としたイメージや認識論からのアプローチによる概念研究がなされている。

参考及び引用文献

- 1) 岡田俊裕, 1987「日本における「景観」概念と「景観」学論」人文地理学, 55-68頁
- 2) 手塚 章, 1987「ドイツ地理学におけるラントシャフト論の展開」筑波大学, 人文地理学研究X, 139頁
- 3) Wilhelm von HUMBOLDT, 1969 "Ansichten der Natur" Philipp Reclam jim. Stuttgart, Adolf Meyer-Abich (原書1808)

- 4) 志賀重昂, 1976『日本風景論』講談社学術文庫, 24 頁 (原書 1894)
- 5) 辻村太郎, 1925「紹介及び批評」地理学評論 1-9, 66 頁
- 6) 大内武次, 1926『人文地理学の地位』人文地理, 15 頁
- 7) 西亀正夫, 1927「地理的景観の個性と通性」地球 8-3, 38 頁
- 8) 佐藤 弘, 1928『政治経済地理学』古今書院, 143 頁
- 9) 小田内道敏, 1929「風景形態としての都市」都市地理研究, 3-4 頁
- 10) 保柳睦美, 1929「文化景観の理論的研究」地理学評論, 100 頁
- 11) 富田芳郎, 1929『経済地理学原理』古今書院, 141-142 頁
- 12) 飯本信之, 1929『政治地理学』改造社, 13-14 頁
- 13) 三沢勝衛, 1930「郷土の地理学的考察に就いて」郷土, 1 号, 52 頁
- 14) 綿貫勇彦, 1930「人文地理学の特性」地理学評論, 6-7, 220 頁
- 15) 辻村太郎, 1930「文化景観の形態学」地理学評論 6-7, 658 頁
- 16) 三沢勝衛, 1931「郷土の地理学的研究と其の焦点」地理教育 14-5, 66 頁
- 17) 飯本信之, 1932「地理的調和の政治地理学的意義」地学雑誌, 昭和 7 年 11 月号, 579-580 頁
- 18) 辻村太郎, 1932「景観の話」国立公園, 4-5, 2 頁
- 19) 小牧実繁, 1933『岩波講座地理学第 1 歴史地理学』43 頁
- 20) 渡辺 光, 1933「景観発達と景観分析 (下)」地理教育 17, 35 頁
- 21) 辻村太郎, 1933『地理学』(総論) 第 1 部第 11 冊, 岩波講座, 9 頁
- 22) 村松繁樹, 1933「文化風景の地理的意義」44-45 頁
- 23) 綿貫勇彦, 1935『地理学方法論』, 地人書館, 235-236 頁
- 24) 佐藤 弘, 1936『最近の経済地理学』古今書院 23 頁
- 25) 飯本信之, 1936「景域に立脚したる地理学とその教授」地理教育 24-1, 中興館 19 頁
- 26) 小原敬士, 1937「歴史地理学の本質」『歴史学研究』歴史学会編 7 (11), 22-23 頁
- 27) 辻村太郎, 1937『景観地理学講話』地人書館, 1 頁
- 28) 野間三郎, 1938「フンボルト覚書—植物地理学に関連して」京都帝国大学文学部地理学研究報告第 2 冊, 104, 105 頁
- 29) 三尾良次郎, 1941『「景観」といふ用語を改めたい』地理学 9-1, 66-68 頁
- 30) 胡 越生, 1941「『景観』は『景観』でよい」地理学 9-3, 1941, 87-89 頁
- 31) 飯塚浩二, 1944『世界史講座』第一巻 47 頁
- 32) 飯本信之, 1955『地理学本質論』「地理学史 (リッテル以来の地理学)」地理学本質論, 新地理学講座 2, 朝倉書店, 85 頁
- 33) ハーツホーン, 1957『地理学方法論』朝倉書店, 157, 184 頁
- 34) 木内信蔵, 1957『人文地理学』134, 135 頁
- 35) 多田文男 (他編), 野間三郎, 1957「景観と環境」『現代地理講座 第 1 巻』, 77, 87 頁
- 36) 野間三郎, 1963『近代地理学の潮流』大明堂「景観」概念のスタート, 98-99, 100 頁
- 37) 宮川善造, 1965『現代地理学原論』大明堂, 116, 117 頁
- 38) 木内信蔵 (他), 野間三郎, 『地理学総論』1967, 朝倉書店, 66, 67 頁
- 39) 佐々木博, 1973『地理学辞典』日本地誌研究所編, 二宮書店, 190, 192 頁
- 40) 杉浦 直, 1974「景観生態学の理論と方法」—東ドイツ学派を中心に, 東北地理 26-3, 138 頁
- 41) 藪内芳彦, 1977『社会地理学論争』古今書院, 4 頁
- 42) 西川 治, 1981「景観論の学際性と民衆性」環境情報科学 10-4, 1 頁
- 43) 「前掲 42」
- 44) 杉浦 直, 1981『生態地理学』朝倉書店, 146, 147, 151 頁
- 45) 田村百代, 1985「地理学における「景観」と「相観」—わが国地理学界での混乱—」大正大学・地理学教室創立 60 周年記念会編「地域の探求」古今書院, 421 頁
- 46) 中村和郎・手塚 章・石井英也, 1991『地域と環境』古今書院, 43 頁
- 47) 藤田佳久, 1992『景観から地域像を読む』名著出版, 6, 8 頁
- 48) 岡橋秀典, 1993「ルーラル・デザインの展開と農村景観論」地理科学 48-4, 25 頁
- 49) 山野正彦, 1995「景観概念の生成と風景画および相貌学の発達—フンボルトの景観論前史」大阪市立大学文学部紀要, 第 47 巻 第 5 分冊 (39-61 頁)
- 50) 横山秀司, 1996「景観と生態学」地理科学, 51-3, 12 頁
- 51) 千田 掄 (編), 1998『風景の文化誌』古今書院, 6, 9, 10 頁
- 52) R.J. JOHNSTON, 2000, *THE DICTIONARY of HUMAN GEOGRAPHY*, Fourth Edition, oxford, Blackwell, 429-430
- 53) 阿部 一, 2000『空間の比較文化史』せりか書房, 「見かた」の変容と風景
- 54) 杉谷 隆, 2001『風景の事典・』古今書院, 15, 16 頁
- 55) 田辺 裕 (監訳), 2003『オックスフォード 地理学辞典』朝倉書店, 236 頁
- 56) 加藤政洋 (他) 編, 西部 均, 2006「日本における景観論/風景論」『都市空間の地理学』ミネルヴァ書房, 164, 170 頁
- 57) 「前掲 1 (59-61 頁)」
- 58) 「前掲 5」
- 59) 「前掲 1 (61 頁)」
- 60) 「前掲 6」
- 61) 「前掲 13」
- 62) 「前掲 8」
- 63) 「前掲 27」
- 64) 「前掲 29」
- 65) 「前掲 30」
- 66) 「前掲 36」
- 67) 「前掲 33」
- 68) 「前掲 34」
- 69) 「前掲 39」
- 70) 「前掲 42」
- 71) 「前掲 45」
- 72) 西川 治, 1951「地理的景観とその研究」地理学評論, 24 巻 0, 36-37 頁
- 73) 「前掲 40」
- 74) 「前掲 44」
- 75) 「前掲 46」
- 76) 横山秀司, 1995『景観生態学』古今書院, 1, 6, 7 頁
- 77) 「前掲 50」
- 78) 「前掲 54」
- 79) 「前掲 51」
- 80) 田辺 裕 (監訳) 2003『オックスフォード 地理学辞典』朝倉書店, 236 頁
- 81) 「前掲 49」
- 82) 「前掲 52」
- 83) 「前掲 53」
- 84) 「前掲 56」
- 85) 「前掲 50」
- 86) 高橋日出男, 1996「シンポジウム「景観論のフロンティア—現代における知のクロスロード」」地理科学 51-3, 1 頁
- 87) Catherine FRANCESCHI, 1997, Du mot paysage et de ses equivalents cinq langues européennes, MICHEL COLLOT, Les enjeux du paysage, Bruxelles, OUSIA, pp. 75-111
- 88) J. AIMPSON, 1989, *The Oxford English Dictionary* 8 : 628-629, Oxford : Clarendon Press

Changing Concepts of Landscape Used in Geography Fields

by

Akio WATANABE*, Isoya SHINJI** and Nobuyoshi YAMABE***

(Received November 21, 2008/Accepted January 23, 2009)

Summary : With the enactment of the Japanese Landscape Law in 2004, *keikan* ("landscape") became a legal term. However, before then the term had been used in many fields in different ways. Developing different processes of introduction and usage of the word, each field has its own concept of landscape. This study traces different transitions of the concept by field, and clarifies their differences with particular focus on the field of geography.

(1) The concept of landscape in Japanese geography developed under strong influence of the German concept, *Landshaft*. This concept, however, is ambiguous even in Germany. Since it concerns the essence of geography, its significance has been under heated debate in Japan.

(2) The focus of the debate has always been whether *keikan* should be understood as "geographical area" or "scenery." This confusion stems from the fact that the German *Landshaft* has this double meaning. Another element that contributes to this confusion is that the English concept of landscape or the Japanese concept of *fūkei* does not have the meaning, "geographical area."

(3) In recent years, in natural geography, areas have been studied in conjunction with ecology. In human geography, on the other hand, the images of scenery have been studied from human points of view, and the concepts of scenery from epistemological points of view, under the influence of the American interpretations of landscape.

Key words : *keikan*, landscape, *landshaft*, change in the concept of landscape, concepts of geography by field

* Department of Environmental Coexistence Studies of Agriculture Graduate Course, Graduate School Tokyo University of Agriculture

** Department of Landscape Architecture Science Faculty of Regional Environment Science, Tokyo University of Agriculture

*** Department of Agriculture, Faculty of Agriculture, Tokyo University of Agriculture